

ドイツ近代国民記念碑について（その3）

——「キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑」から
「諸国民戦争記念碑」まで——

鈴木将史

角柱型記念碑の誕生：「キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑」

ドイツ帝国が国家的事業として建設を推進した最初の国民記念碑である「ニーダーヴァルト記念碑」（1883）の建設資金調達では、ドイツ各地に存在する軍人協会が重要な役割を担ったが、それらはまだ全国的に組織されたものではなかった¹。全ドイツの軍人協会を組織化し、一大政治勢力にまでまとめ上げたのは、「キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑」（„Kyffhäuser-Denkmal“）建設が契機になったと考えられる。ドイツ帝国初代皇帝ヴィルヘルム I 世が没して2週間後の1888年3月22日、ドイツ軍人協会新聞にドイツ統一記念碑建立の呼び掛けが掲載された。軍人協会とは、七年戦争後からドイツ各地に結成された退役軍人の親睦団体である。1873年にはプロイセン、北部、中部ドイツ軍人協会が「ドイツ軍人協会連盟」（„Der Deutsche Kriegsbund“）を結成し、1896年には全軍人協会の3分の2（9,893協会850,776会員）が参加する一大組織に成長する。この連盟が原動力となり、「キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑」の建設は推進されたのだが、記念碑建設委員会には南ドイツの軍人協会も参加するという、全ドイツの軍人協会が総力を挙げて取り組んだ初の記念碑建設事業であった（ただ、統一に関してプロイセンと軌を一にしていなかったバーデンとバイエルンは当初参加を見送った）。96年に記念碑が落成すると、それを機に設立された全ドイツをまとめる軍人協会連盟

¹ 拙論「ドイツ近代国民記念碑について（その2）—『ケルン大聖堂』から『ニーダーヴァルト記念碑』まで—」（平成23年『小樽商科大学人文研究』第121輯97—111頁）105頁参照。

「キュフホイザー委員会」(1899年「キュフホイザー連盟」に改称)は、2,000協会会員160万人を有する組織となった。第一次世界大戦直前のキュフホイザー連盟は、32,179協会280万人が登録する最大の国家主義団体に膨れ上がり(全有権者数の15%)、全ドイツの労働組合員数(250万人)を凌ぐ勢力を誇ったのである。「キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑」は、「ヘルマン記念像」と同じく民間のイニシアチブにより建設された記念碑だが、個人の制作した「ヘルマン記念像」と異なり、政治性の強い大組織が計画を推進したため、高度に政治的な理念が盛り込まれたモニュメントとなっている。(図1参照)

記念碑の建設にあたって、建設委員会はそれまでと異なり明確な目的を設定していた。即ち、新生ドイツ帝国の歴史的正当性、つまり神聖ローマ帝国の正統性を受け継ぐ帝国のアピールである。神聖ローマ帝国を主導したオーストリアを含む大ドイツ主義のもとに統一を果たしていれば、正統性の継承をより自然に印象付けることができたであろうが、オーストリア・ハプスブルク家を統一国家から除外した以上、ドイツ帝国は殊更この正統性を主張する必要に迫られたのである。こうした目的に従い、建設候補地は当初神聖ローマ帝国首都ゴスラーも検討されたが、ゴスラーはプロイセンに属しているた



図1：キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑

め、南ドイツからの建設寄付金を募りにくい点が障害となった。最終的に選ばれた建設地は、「皇帝伝説」（神聖ローマ皇帝フリードリヒ [バルバロッサ] は死んではおらず、山中の洞窟で眠り続け、山上を飛び回る鳥がいなくなる時—ドイツに幸福が訪れる時—に復活する）の根付くテューリンゲン地方のキュフホイザーである²。この地には11世紀以来皇帝の居城「キュフハウゼン」

- 2 グリム兄弟は『ドイツ伝説集』の中で、「キュフホイザーに眠る赤髭皇帝バルバロッサ」と題して以下の内容の伝説を紹介している。

「皇帝フリードリヒは死んでおらず、最後の審判まで生き続ける。それまで彼はキュフホイザーの山中に人知れず暮らし、彼がそこを出る時には自分の盾を一本の細い木に立てかける。するとその木は青々と茂り、良き時代が到来する。時折彼は山に入った人々と言葉を交わし、その姿を外に顕しもする。普段の彼は円い石のテーブルを前にして長椅子に腰掛け、頭を片腕で支えながら眠っている。その髭は長く伸び、二筋に分かれ、一方は石のテーブルの中を、もう一方はテーブルの周囲に巻き付いている。彼が目覚めるまで髭はテーブルを3周巻かなければならないが、今はまだ2周巻いたところである。彼は1669年にひとりの農民に見られているが、その時はびくりとも動かなかった。だがある時ひとりの羊飼いが笛を奏でたところ、それを気に入った皇帝は彼を招き入れ、立ち上がってこう尋ねた。『鳥はまだ山の周りを回っておるか?』羊飼いが肯定すると、彼はこう叫んだ。『それではわしはもう百年長く眠らなければならぬ。』(J.Grimm/ W.Grimm : Friedrich Rotbart auf dem Kyffhäuser. In: Deutsche Sagen, 1.Bd., Nr. 23, München 1965, S.49f.)

同伝説集中には、他にも同様の話が収録されているが、この伝説こそ19世紀まで広くドイツに流布した「皇帝伝説」中最も有名な「フリードリヒ伝説」のあらましである。ヤコブ・グリムは『ドイツ神話集』の中でも「失踪」モチーフの例として、13世紀より連続として伝わるフリードリヒ伝説を挙げ、「[...] この伝説はまた、二人のフリードリヒ、即ちI世とII世を混同した可能性がある。」(J.Grimm : Deutsche Mythologie, II. Bd., Frankfurt a.M./Berlin/Wien 1981, S.801.)と結論している。神聖ローマ帝国中興の祖であり、ドイツの権威確立に大きく寄与したフリードリヒI世「赤髭（バルバロッサ）皇帝」（1122-1190）は、カール大帝と並びドイツ文学に最も多く取り上げられてきた英雄的皇帝である。バルバロッサは存命中から先代コンラートIII世と共に皇帝年代記執筆を奨励し、彼を扱う様々な作品が宮廷年代記作家達により編まれてきたが（Otto von Freising : „Gesta Friderici“ [1189] など）これらの作品には勿論フリードリヒ伝説は登場しない。ところが、I世の死後1世紀ほどを経てI世とII世を混同した文献が現れるようになり、以降この混同はフリードリヒ伝説まで広がったものと考えられている（Vgl. Hermann Grauert: Zur deutschen Kaisersage. In: Historisches Jahrbuch. Im Auftrag der Görres-Gesellschaft, 13. Bd. Jg. (1892), S. 141f.）。フリードリヒ=バルバロッサ説は、従って数百年をかけて徐々に形成された俗説なのだが、グリム兄弟が『ドイツ伝説集』を著した1816年にはこの説が支配的になっていたものと考えられる。グリムは『ドイツ伝説集』第2巻494番の伝説「消えた皇帝フリードリヒ」の末尾にも「この伝説はフリードリヒII世とI世を混同している」と断っているが、この時点で「皇帝フリードリヒ」はバルバロッサを指すという説が学問的にも優勢となり、文学的にもリュッケルト（Friedrich Rückert）の有名なバラード „Barbarossa“（1805）が書かれ、解放戦争によりドイツ愛国精神が鼓舞されるに至り、フリードリヒ=バルバロッサ説は国民に完全に定着した。

が建てられており、12世紀中頃にはフリードリヒI世（バルバロッサ）により城砦の拡張が成され、現在もその城址が600メートル以上に互に残されている。即ち委員会は、この由緒正しき土地にドイツ皇帝ヴィルヘルムI世の記念碑を建てることにより、ハプスブルク家を飛び越して、より古い神聖ローマ皇帝家でありバルバロッサを生み出したホーエンシュタウフェン家からの新帝国の直接的な継承性を訴えようとしたのである。従って、建設委員会にとっては建設地が従来の記念碑以上に重要な要素となり、城址も含めた周辺地域全体を「聖地」に仕立て上げようとした意図が窺われる。記念碑を中心として聖地を造成しようとする計画は、次の「諸国民戦争記念碑」で更に明確な形を取る。（ただ、「キュフホイザー記念碑」の場合は、ドイツ愛国者団体の「巡礼」をも期待し、人里離れた奥地に記念碑を建設したため、現在はさしたる観光収入源にもなり得ていない。）記念碑のデザインとしては、山間地に建設されるため遠方からでも識別できるよう、巨大な„Masse”（集合体的建築が求められたが、これは従来のトラヤヌス記念塔様式や古代神殿風建築³と一線を画し、ドイツ近代国民記念碑固有の様式を模索するものであった。公募の結果、シュミッツ（Bruno Schmitz）のプランが採用され記念碑は角柱型となったが、シュミッツは後にこのデザインを発展させた「諸国民戦争記念碑」でドイツ近代国民記念碑スタイルを確立した。

「キュフホイザー記念碑」は、「ニーダーヴァルト記念碑」同様、宮廷礼賛の要素も当初から兼ね備えた国民記念碑であるが、特にホーエンツォーレン家とドイツ帝国の正統性を表現するために、より限定的なメッセージ性を有している。その分戦勝記念碑の色彩は弱まったが、この点においては、時代の情勢を背景とした政治的要素を多分に有する記念碑であるといえよう。そのため、「ニーダーヴァルト記念碑」に較べ群衆像や一般兵士像は省かれるなど、記念碑全体が表現する国民性は却って後退している。

³ 拙論「ドイツ近代国民記念碑について（その1）－『フリードリヒ大王記念像』から『ヘルマン記念像』まで－」（平成18年『小樽商科大学人文研究』第111輯43-65頁）46-48頁参照。

この記念碑は、中心線上下にそのメッセージを集約している。即ち、塔土台前面は洞窟を模した中庭「バルバロッサ・ホーフ」がしつらえられ、背景正面に目覚めるバルバロッサ像が置かれる。そしてその上部にヴィルヘルム I 世騎馬像が位置することにより、フリードリヒ「赤髭皇帝」(バルバロッサ)からヴィルヘルム「白髭皇帝」(バルバブランカ)への連続性が視覚的に訴えられ、フリードリヒ I 世が予兆し、ヴィルヘルム I 世により実現された真に幸福なる統一ドイツ帝国の誕生が表現されるのである⁴。「バルバロッサ・ホーフ」はアーケードに囲まれているが、このアーケードはアーチ状となっているため、正面から記念碑を見ると、中央アーチを通して見えるバルバロッサと、アーケードに乗っているかに見えるヴィルヘルムの姿が殊更対比・強調されるデザインとなっている。(図2, 図3参照)

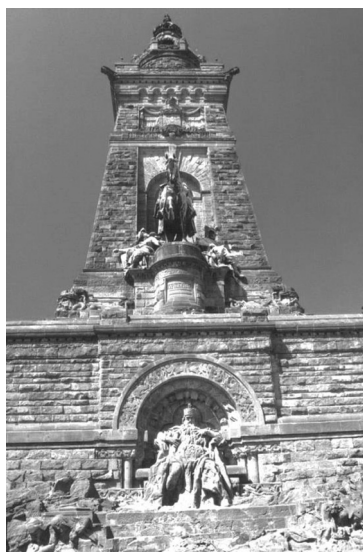


図2：キュフホイザー記念碑（正面） 図3：キュフホイザー記念碑（斜め正面）

⁴ 当時ヴィルヘルム I 世とバルバロッサは、絵画や彫刻や文学や学校での歴史教育に至るまで、ことあるごとに並び称せられた。(Vgl. Monika Arndt: Das Kyffhäuser-Denkmal—Ein Beitrag zur politischen Ikonographie des Zweiten Kaiserreiches. In: Wallraf- Richartz-Jahrbuch, Bd.40 [1978], S.76.)

「ヘルマン記念像」, 「ニーダーヴァルト記念碑」と続いた19世紀大型国民記念碑の最後を締めくくる役割も「キュフホイザー記念碑」は担い(高さ81メートルのこの記念碑は、それまで建設された記念碑の内最も高い)、当地をトイトブルク古戦場(「ヘルマン記念像」)やライン川(「ニーダーヴァルト記念碑」)に並ぶゲルマン民族の聖地とするためにも記念碑建設は必要であった。キュフホイザーは、19世紀前半からブルシェンシャフトが好んで集会に利用しており、近隣のローテンブルクに結成された学生による「キュフホイザー同盟」も記念碑への「巡礼」を繰り返した(現代にも存在する「キュフホイザー同盟」は大手軍人協会であるが、第二次世界大戦後のローテンブルクの城壁復元にも寄付を行い、城壁にはその銘板が嵌め込まれている[図4参照])。先の二記念碑には付設されていなかった集会用テラス(2万人収容可能)も「キュフホイザー記念碑」の正面には用意され、様々な行事に対応する「総合的国民記念碑」の様相は、「諸国民戦争記念碑」に受け継がれる。「ニーダーヴァルト記念碑」は記念碑からの眺望を優先して高台に建設されたため、広場用のスペースを取ることができず、「ヘルマン記念像」は「民族を率いるヘルマン」のイメージを形成する目的で、むしろ像後方にスペースが作られたが、それは正式な式典用広場と呼べるものではない。



図4：キュフホイザー同盟によるローテンブルク城壁復元事業への寄付銘板

1896年の落成式には18,000人の退役軍人を含む3万人が訪れたが、式典に参加できたのは5千人余りの特権階級層のみであった。つまり、記念碑落成は国民ならぬ「帝国」により祝われたのであり、最終的な記念碑の位置付けは、皇帝を私的にではなく帝国のシンボルとして公的に顕彰する「帝国国民記念碑」に定められたといえよう。「キュフホイザー記念碑」は、「ヘルマン記念像」、「ニーダーヴァルト記念碑」とほぼ「同格」の記念碑であるといえるが、「ヘルマン記念像」は帝国成立以前のドイツ国民の独立精神を象徴し、「ニーダーヴァルト記念碑」では父なるライン川へのノスタルジーの前に帝国理念が後退してしまったのに対し、「キュフホイザー記念碑」は、初めて確固とした帝国理念を明確に表現したのである。この記念碑には、プロイセンが元来有していたドイツ建国に際しての使命が、帝國的使命へと格上げされた様子を見て取ることができよう。

ドイツ様式国民記念碑の完成：「諸国民戦争記念碑」

「諸国民戦争記念碑」（„Völkerschlachtdenkmal“）は、19世紀中頃から世紀転換期にかけて盛り上がった記念碑建造ブームの集大成として、対ナポレオン解放戦争の決戦であるライプチヒ会戦百周年記念日（1913.10.18）に落成したドイツ国民記念碑中最大（全高91メートル）のモニュメントである。ライプチヒ会戦を記念する碑としては、既に開戦直後の1813年から当地での建設計画が持ち上がっていたため、計画・施工期間としてはベルリンの「フリードリヒ大王記念像」を凌ぎドイツ最長となる。実際の建設事業としては、1863年の50周年記念日にライプチヒにおいて礎石⁵が置かれたものの、社会が激動する中、記念碑建設着工には至らなかったわけだが、「諸国民戦争記念碑」は、この計画を継承する形がかつての礎石を基に建設された。（図5参照）

建築家ティーメ（Clemens Thieme）がライプチヒ会戦記念碑を実現するべ

⁵ 礎石は、„Napoleonstein“と呼ばれるナポレオンがライプチヒ会戦において退却を命令した場所を指示する石の傍に置かれた。



図5：諸国民戦争記念碑

く「ライプチヒ諸国民戦争記念碑期成ドイツ愛国者連盟」(„Deutscher Patriotenbund zur Errichtung eines Völkerschlachtdenkmal bei Leipzig“)を結成するのは、キュフホイザー記念碑が建設中であった1894年である⁶。キュフホイザーから資金調達ノウハウを受け継いだ形となるこの記念碑建設計画は、ニーダーヴァルトやキュフホイザー同様、比較的スムーズに進んだが、先の二記念碑が、ニーダーヴァルトは国家基金、キュフホイザーは右翼諸団体からの寄付をもとに建設されたのに対し、諸国民戦争記念碑は、宝くじの

⁶ フリーメイソンの団体が母体であると推定される「ドイツ愛国者連盟」(ティーメはフリーメイソンのライプチヒ支部「アポロ」のメンバーであった)は、既に結成されていた右派勢力「全ドイツ連盟」(„Alldeutscher Verband“)と連携し、社会民主主義が台頭し揺らぎつつあった帝国の結束を強化せんと、ドイツ至上主義、反仏思想を機関誌で積極的に提唱する。これは結局ナチス・ドイツの理念へと直接連なり、第二次世界大戦中ドイツ愛国者連盟はNSDAPの有力な支持母体となった。戦後連盟は当然の如く連合軍の弾圧を受け、自らを「1813年戦死者追悼連盟」(„Bund zur Erinnerung der Gefallenen von 1813“)と改名して生き残りを図るが、結局1946年に連盟はソ連軍総司令部に解散を命じられ、それまで連盟の所有となっていた「諸国民戦争記念碑」はライプチヒ市に移管された。(Vgl. Steffen Poser: Der Weg des freien Zusammenwirkens patriotisch tätiger Kräfte. Der Deutsche Patriotenbund. In: Stadtgeschichtliches Museum Leipzig: Völkerschlachtdenkmal, Leipzig 2003, S. 116-133.)

発売や建設現場の見学料徴収、或いは記念碑グッズの発売など、一層多角的な資金集めを行なった。更に大都市ライプチヒにほど近い郊外という地の利もあり、同市も毎年1万マルクずつ援助している。その結果、早くも1898年には、キュフホイザーの設計者シュミッツ⁷のプランのもとに工事が着工されたのである。こうして順調に計画が進捗した反面、諸国民戦争という百年前の事件を新たに顕彰しようとする行為を、「アナクロニズム」と断じる意見があったことも確かである⁸。この懸念を払拭するためにも、記念碑は戦勝賛美より、むしろ戦死者追悼色を強く打ち出すデザインを必要とした。この記念碑は、柱状記念碑であった「キュフホイザー記念碑」の重厚性を更に強調した台座状とも呼び得る独特な形状を示しており、同時期にドイツ全土に建設された「ビスマルク塔」と並び、華やかな装飾を極力排したドイツ様式記念碑の典型といえる。君主像は設置されず、ドイツを象徴する聖人ミヒャエルの全身像や、バルバロッサの頭像（側面階段脇に位置する鼻から上のみという例外的な彫刻）の他は、塔の内外を兵士像やアレゴリー像が取り囲み、記念碑の抽象性は非常に高い（アレゴリー像も「平和」や「戦争」や「自由」といった伝統的なものではなく、「犠牲的精神」や「信念の強さ」などといった、より特定された概念を表し、その概念を表現するべく現代的パントマイムとも呼び得るポーズを取っている）。特徴的であるのは、兵士像とアレゴリー像

⁷ シュミッツは他にも「ヘルマン記念像」北西に位置する「ポルタ・ヴェストファリカ・ヴィルヘルム皇帝記念碑」（„Kaiser Wilhelm I.-Denkmal an der Porta Westfalica“）（1896）や、コブレンツの「ドイチェス・エック・ヴィルヘルム皇帝記念碑」（„Kaiser Wilhelm I.-Denkmal am deutschen Eck“）（1897）の設計を手掛け、この時期には「国民記念碑建築家」の第一人者的存在となっていた。1896年8月に行われた記念碑設計コンペでシュミッツのプランは第4位であったが、その名声から結局彼に設計が委ねられたのである。因みにその時の第1位は、後に代表的な「ビスマルク塔」を設計し、やはり有数の記念碑建築家としてナチスにも重用されたクライス（Wilhelm Kreis）である。（Vgl. Lutz Tittel: Monumentaldenkmler von 1871 bis 1918 in Deutschland. In: Kunstverwaltung, Bau- und Denkmal-Politik im Kaiserreich [hrsg. v. Ekkehard Mai u. Stephan Waetzoldt], Berlin 1981, S.247f.）

⁸ Vgl. Deutschlands Denkmal der Völkerschlacht, das Ehrenmal seiner Befreiung und nationalen Wiedergeburt (Weiheschrift der Deutschen Patriotenbundes, bearb. v. Alfred Spitzer), Leipzig o.J. (1913), S.75-78.

が全て眼を閉じ頭を垂れている点で、記念碑全体が戦没者への黙祷を捧げる形に統一されている。(図6参照)

現代の戦争記念碑は、「慰霊碑」の形式を取り鎮魂の意で建造される例が大部分だが、「諸国民戦争記念碑」は、こうした現代戦争記念碑的側面をも多分に持ち合わせた初のドイツ国民記念碑と考えることができよう。また同時に、この記念碑は中世において戦場跡にしばしば建てられた礼拝堂(Schlachtkapelle)⁹への回帰的建築物と位置付けることもでき、中世から現代への記念碑建造物の橋渡しをするモニュメントと解釈することも可能である。

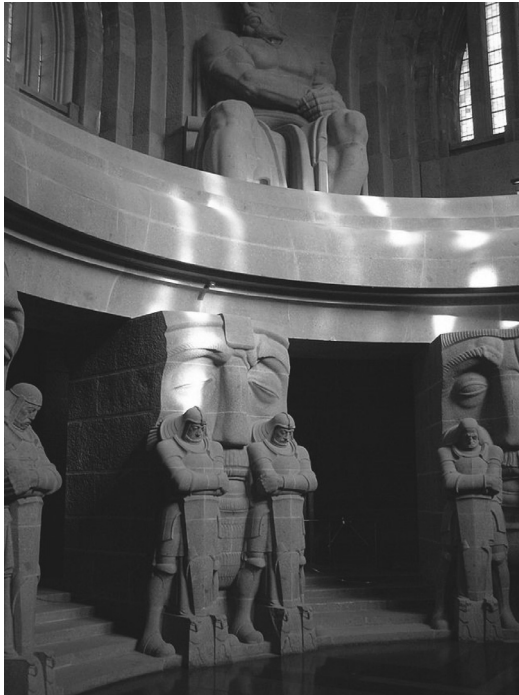


図6：諸国民戦争記念碑内陣

⁹ 例えば、ヴェルフェスホルツ(ザクセン)の戦い(1115)の後や、スイス軍がオーストリア公レオポルトI世を破ったアウフ・デア・ショルネンの戦い(1315)跡に建てられた礼拝堂„Schlachthüsl“など。(Vgl. Reallexikon zur deutschen Kunstgeschichte, S.1264.)

しかし、ドイツ近代記念碑の総決算として建設された「諸国民戦争記念碑」ではあるが、「ヘルマン記念像」ほどの大衆的人気を博するには至らなかった。翌年より勃発する第一次世界大戦により、国民は早々に記念碑の存在を忘れ、それに続くワイマール共和国時代には、ドイツ帝国の過去の栄光を振り返る社会的気運は全く薄れてしまったからである。ところが皮肉なことに、第二次世界大戦後に「諸国民戦争記念碑」はドイツ民主共和国（東ドイツ）から再び注目されることとなるのである。その理由は、ロシアとドイツが共に手を携え外敵に勝利した戦争を顕彰した記念碑として、冷戦下の東独―ソビエトの連合を象徴するにはまたとないモニュメントであると認められたからであった¹⁰。また、それまでの国民記念碑の多くは、ヴィルヘルム I 世を「国父」として顕彰する意匠を凝らしていたが、この記念碑には皇帝像が併設されていない。この点も社会主義国家には都合がよかったのである。そのため、「ドイチェス・エック・ヴィルヘルム皇帝記念碑」や多くの「ビスマルク塔」を始めとして、様々な国民記念碑が、戦後に破壊されたり、或いは爆撃で損傷した姿のまま放置されたのに対し、「諸国民戦争記念碑」は政府により修復される幸運を得たのであった。

ドイツ再統一が成った現在、「諸国民戦争記念碑」はワイマール共和国時代同様一地方名所の地位に甘んじているが、この記念碑を最後に大規模な国民記念碑はもはや建設されることもなかった。「塔状であり、オベリスク状であり、ピラミッド状であり、柱状の形態を持つ」¹¹ドイツ様式記念碑スタイルの確立、「国民記念教会」的機能も見据えた内部の神殿的構造、そしてタージ・マハルの如く前面に広大な池を配し鏡に見立てることにより、敷地全体を聖地化しようとした意図など、「諸国民戦争記念碑」は、近代ドイツにおける国民記念碑建設の最後を締め括るにふさわしい完成度を示した記念碑といえよ

¹⁰ Vgl. George L. Mosse: Die Nationalisierung der Massen. Politische Symbolik und Massenbewegungen in Deutschland von den Napoleonischen Kriegen bis zum Dritten Reich. Frankfurt a.M./Berlin/Wien 1976, S.84.

¹¹ 当時の設計コンペ告示書より。（Titel: Monumentaldenkmäler von 1871 bis 1918 in Deutschland. S.247.）

う¹²。だが⁹、前面に用意された広場で、以降定期的な祝典が催されることはなく、記念碑中最大の建設費（約600万マルク）を投入しながらも、国民・国家意識の抛り所たるべき地位をついに獲得するには至らなかった。この点もまた、19世紀前半から約一世紀に互り無数に制作された国民記念碑群の行く末を暗示する事実と呼ぶことができる。

¹² 当初の建築計画から見れば、現存の記念碑は未完成であるともいえる。何故なら、記念碑の敷地の正面には、巨大な競技場が建設される計画となっていたからである。ドイツの愛国精神運動は、ナポレオン時代に「ドイツ体操」による肉体の鍛錬で母国の解放を図った「体操の父」F.W.ヤーンの影響のもと、スポーツ振興に格段の関心を寄せた。（従って、ドイツ各地に作られた「スポーツクラブ」は運動の重要な支持母体となる）「ドイツ愛国者連盟」が結成された1894年は、パリにクーベルタンによる「国際オリンピック委員会」が結成された年でもあり、「愛国者連盟」は諸国民戦争記念碑前で当然催される国家的式典の中心に、ドイツ国民による「オリンピック競技会」を考えたのである。結果的にこの計画は、記念碑が完成した直後に第一次世界大戦が勃発したため実現しなかったが、ライプチヒをベルリンとは異なる「スポーツの聖地」とする思想が存在したわけである。2003年にライプチヒは本命のハンブルクを破り、2012年オリンピック開催候補地としてドイツから推薦されるが、東西ドイツ統一の象徴的都市という触れ込みの他に、こうしたイメージも味方したものとと思われる。（Poser: Von wild gewordenen Kämpfen, listigen Brüdern und Pyramidioten. Geheimnisse des Völkerschlachtdenkmal. In: Völkerschlachtdenkmal, S.134-136.）